



「豚の国」と持続可能性(【ワークショップ報告 第2回】2022年10月6日(木))

茶谷, 直人

(Citation)

21世紀倫理創成研究, 16:29-33

(Issue Date)

2023-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100482792>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482792>



【ワークショップ報告 第2回】 2022年10月6日（木）

「豚の国」と持続可能性

茶谷 直人
神戸大学大学院人文学研究科 教授

本報告では、プラトン『国家』第2巻 369B-373D に登場する「豚の国」論の概略が示された後、当該議論について浮上する問いと先行研究の論点が紹介された。そのさい、プラトン『国家』のテキスト分析という観点だけでなく、近年注目されている持続可能性の観点からも考察された。

以下、発表と配布資料に基づいて報告の概要を示す。

1. 「豚の国」を真面目に検討すべき（したい）理由

プラトン『国家』で開陳される「理想国家（カリポリス）」論によれば、「善のアイデア」を掴み遂げた哲学者が王になるか、あるいは王がそうした哲学者となり、そのような君主（いわゆる哲人王）のもとで守護者階級・軍事階級・生産者階級が自らの適性を発揮する仕方それぞれの本分を果たす国家こそが理想国家だとされる。

このような理想国家が議論されるにあたり最初に描写されるのが、本報告が考察対象としている「豚の国」である。『国家』では、この議論は早々に中止（あるいは却下）され、その後に続く長大な理想国家（カリポリス）論と比較すると圧倒的に僅かな分量しかなく、議論の主題が理想国家（カリポリス）論に移行してからほとんど顧みられない。また、この議論では、ソクラテスによって描写された原初的なポリスが対話相手のグラウコンから「豚の国」だと揶揄される。これらの点から、一見すると、この「豚の国」論はその後に続く「理想国家（カリポリス）」論の単なる「前座」あるいは「引き立て役」のように思われるかもしれない。

「豚の国」と持続可能性

しかし、テキスト（『国家』第2巻 372D4-E8）によれば、ソクラテスは、グラウコンが「豚の国」と揶揄するポリスのことを「真正なるポリス」、「健全なポリス」と呼んでいる。

このような背景のもとで、本報告では当該テキストの整理と分析が行われた後、そこで語られる社会像・国家像の整理および評価がなされた。

2. 「豚の国」はこうして作られた

議論の端緒は、ポリスにおいて正義と不正義がいかにして生じるのかを考察することであった。そこでソクラテスは、ポリスが發生する過程を「言葉によって観照する」ことで、ポリスの正義と不正義の發生過程が見てとれると述べる（『国家』369A-B）。そこでソクラテスは、「われわれの必要性」がポリス發生の唯一の理由だと指摘する。すなわち、われわれは生活するために自足していないため、一つの住まいに集まり、自分にできることを分け与え合うのである。

原初的なポリスの構成員は、生存のために必要な食料を提供する農夫、住居を提供する大工、衣服を提供する織物職人と靴職人、そして場合によっては身体の世話に関わる人を合わせた4人（あるいは5人）である。このような共同体を結成する行動原理・動機は、自らの生存という自己利益の実現である。ただし、各構成員によって利己主義的な振る舞いが互いに交わされるわけではなく、むしろ、構成員同士が相互に協力し合うことで、全構成員における最低限の生存が確保される。すなわち最小国家成立の段階からすでに、「自身の生存・生活の維持という自己利益の実現のために各自が互いに利他的に振る舞う」という発想、「自己利益と他者利益・公益の調整」という合理的思考・知的な勘考が働いている。

このような相互扶助のポイントは、各構成員が生まれつき自分に向いている仕事だけに専念するよう求められていることである。すなわち、各構成員が自分の仕事に専念して他の構成員の分も生産し、それぞれが余剰分を分け与え合うことで「より容易に」「よりうるわしく」ポリスが運営される。

このようにして成立したポリスは、各成員たちによる分業の細分化がすすみ、また、市場や貨幣が誕生し、小売制度や賃金労働者が登場することで、次第に拡大していく。そして「もう小さいとはいえない」段階にまで拡大したポリスは、他のポリスとの交易を行う必要が生じ、さらに拡大がなされる。

この段階に達したポリスは自足的な状態を確保しており、このポリス内には不正

義が存在しないことがソクラテスたちによって同意される（『国家』371E-372A）。

3. 「豚の国」の生活様式が意味するもの

以上のように記述された「豚の国」における生活様式について、衣食住に関しては次のように整理される。まず、衣服については、住民たちは自らの仕事や生活に支障をきたさない衣服を身につけており、過度な装飾はなされない。また、住居については、家具や食器類は葦などの植物の茎や葉を用いてシンプルなものが制作される。したがって、複雑に加工した家具は用いられない。そして食事については、主食には大麦や小麦を挽いた粉を原料とするパンが採用され、主菜としては各種の葉野菜や根菜の煮物、オリーブ、チーズなどが食される。また付け合わせとして豆類や無花果などが食される。食後には果実やナッツ類が供され、ワインが飲まれる。

このような「豚の国」における食習慣は、ゆるやかな意味でのヴェジタリアニズムと言えるであろう。こうした食習慣を採用することで得られる利益は、「健康」と「平和」の二つである。まず健康については、人々が肉食を中心とする食習慣を採用することで不健康な人が増加し、医者が多数必要になる可能性がソクラテスによって指摘されている（『国家』373D）。次に平和については、人々が肉食を採用すれば、食用の家畜の広範な飼育が要請され、広大な牧草地や耕作地が必要となることが予想される。そうするとポリスは自身の領土だけでは土地がたりなくなり、他のポリスを侵略する必要に迫られる。このように、自国の構成員の欲望を充足させるために、戦争が不可避免的に生じることになる。

「豚の国」における食習慣において重要なことは、組織的な食用家畜の飼育や飼料の生産を必要とするほどまでに肉食を行う食生活が害悪のポイントであることである。すなわち、健康の観点にせよ、平和の観点にせよ、ソクラテスが避けるべきだと主張しているのは、食用家畜の飼育（そしておそらく魚の場合は養殖）であると考えられる。

4. 「豚の国」論をどう考えるか（先行研究との差別化）

報告の最後に、「豚の国」論に関する先行研究の概要が述べられた後、本報告と先行研究との差別化について述べられた。

まず、「豚の国」論については従来、「豚の国」はいわゆる「黄金時代（Golden

Age)」のような空想の産物であり、原始的で牧歌的なユートピア世界がそこでは描かれているとの解釈が一部でなされてきた (Annas)。しかしながら、豚の国における住民の生活は「華美ではない」としても「粗末」でも過度に禁欲でもない。「豚の国」は労働が存在しない黄金時代の牧歌的世界とは異なり、各自が自らの適性に即した仕事に従事し、その所産を相互扶助的に分かち合う共同体である。「豚の国」を原始的で牧歌的なユートピア世界であるとは言い難い。

また、「豚の国」に正義が成立しているのは、住人たちが衣食住に関わる欲求を偶然的にコントロールできているだけのことであるという解釈が存在する (Barney)。すなわち、魂の三部分説に照らして表現すれば、欲望の部分が知的部分による支配下におかれることによってではなく偶然自己統御しているだけのことであり、そうした状態はいつか崩壊し、人々は欲望を必要以上に拡大させるだろうという解釈である。しかし、Green らによって指摘されているように、そもそも豚の国が生じたその端緒に存在する、相互の自己利益の維持のために互いに利他的に振る舞うという発想、そして自己利益と他者利益のバランス保持のための合理的計算は、知的な思案・勘考によってこそなしうのものであり、「欲望の部分の自己統御」と呼べるものではない。また、健康の維持と平和の実現（戦争の回避）を見据え、自分たちのライフスタイルを個人的かつ制度的にも定めていくという発想は、高度な合理的思考の産物以外の何物でもないはずである、と反論できる。

豚の国においては、住民たちが互いに利他的に振る舞い合うことで調和的な相互扶助が成立している。ただしそのような円満な協力関係は、元をたどれば「自分だけでは多くのものを欠いている」状況で、自分の利益のために構築されたものである (『国家』369B-C)。このように、各人の行為を支配する究極的な原理が利己主義にあり人々の友好関係があくまで手段的な性格のものであるとすれば、何らかの状況の変化により有用的な関係が損なわれ、互いの利害関係が一致しない事態が生起すれば協力関係は容易に崩壊してしまうのではないか、という解釈がある (McKeen ら)。これに対しては、次のように応答できるだろう。すなわち、テキスト上では、ソクラテスは「豚の国」には不正が存在しないと明言しているのだから、「豚の国」で採用される生活様式を踏み外した生活様式が導入されない限り、人々は自己利益と他者利益のバランスを保持した振る舞いを遂行し、円満な協力関係も崩壊しないのだ、と考えることができる。

われわれが考えるべきは、ソクラテスは何を根拠に、「豚の国」には不正が存在しないと断言しているのか、という点である。確かに、「豚の国」のプロトタイプとしての最小国家（農夫、大工、織物職人、靴職人による共同体）が結成された目的は、自己の生存という各人のニーズであった。ただ、そこからより安定的かつ効率的でうわしい生活の実現へと人々の眼差しが移ることでポリスは成長した。そのような成長したポリスをソクラテスは、その存続の上でそれ以上でもそれ以下でも不適切であるような、必要十分的に自足した「完全な」ポリスと呼んだのである。

この「完全な」ポリスにまで発展した段階においては、当初の「自己の生存」というレベルでの自己利益追求という動機あるいは理由だけではなく、健康な生活と戦争のない社会の実現というより高度な目的が公共的なレベルで設定されるに至っていると考えられる。ソクラテスは、単純な意味での自己利益に加えこのような普遍的原理に導かれて生活する市民たちによって構成された国家であれば、「完全」で（少なくとも容易には）調和が崩壊することのない共同体であるとみなすことができると考えたのではないだろうか。

（藤井宏 要約）

参考文献（報告内で言及されたもの）

- Annas, J., *An Introduction to Plato's Republic*, Oxford University Press, 1981.
- Barney, R., 'Platonism, Moral Nostalgia, and the 'City of Pigs'', *Proceeding of the Boston Area Colloquium in Ancient Philosophy* 17, pp. 207-227, 2001.
- Green, J., 'The First City and First Soul in Plato's Republic', *Rhizomata*, 9 (1), pp. 50-83, 2021.
- McKeen, C., 'Swillsburg City Limits: The 'City of Pigs' : Republic 307C-372D', *Polis* 21, pp. 70-92, 2004.
- Rowe, C., 'The City of Pigs: a Key Passage in Plato's Republic', *Philosophie antique Problèmes, Renaissance, Usages*, 17 Platon et la politique, pp. 55-71, 2017.